

7 調査結果

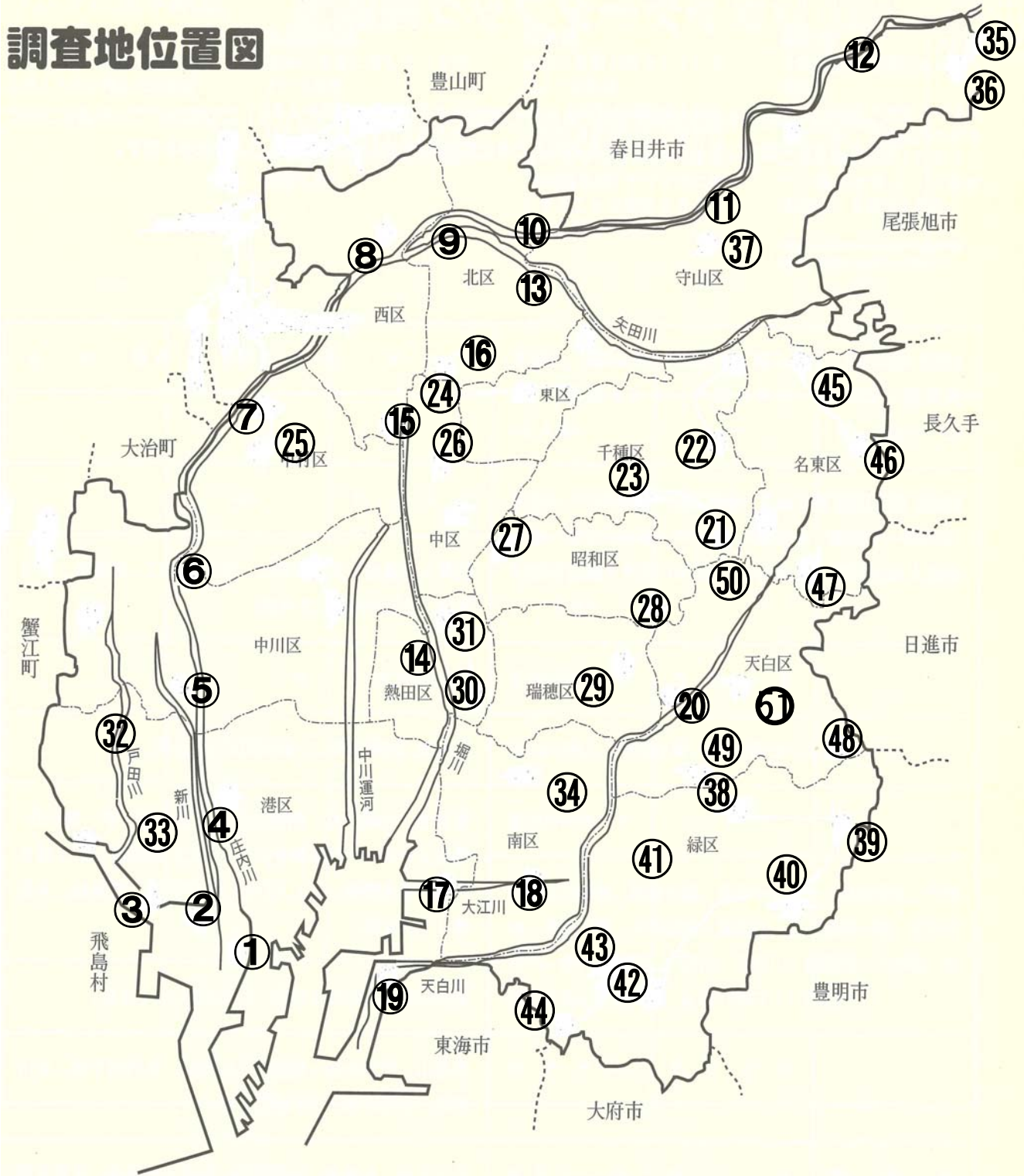
調査地一覧

河川ごとに河口から上流へ、それ以外は区ごとになっています

No.	H21 年度版 のNo.	調査地名	水系・区	調査地 紹介 ページ	調査 結果 ページ
1	8	庄内川河口	庄内川	51	84
2	9	新川河口	庄内川	52	88
3	10	日光川河口	庄内川	52	90
4	7	庄内川(明德橋～庄内新川橋)	庄内川	53	92
5		庄内川(新前田橋～明德橋)	庄内川	54	95
6	49	横井山緑地	庄内川	54	97
7	6	庄内川(枇杷島大橋～万場橋)	庄内川	55	99
8	5	庄内緑地	庄内川	55	101
9	4	庄内川(水分橋～庄内川橋)	庄内川	56	104
10	3	庄内川(松川橋～水分橋)	庄内川	56	105
11	2	庄内川竜泉寺(吉根橋～東名阪)	庄内川	57	106
12	1	庄内川(東谷橋～吉根橋)	庄内川	57	108
13	48	矢田川橋緑地	庄内川	58	110
14	42	堀川(白鳥付近)	堀川	58	111
15	41	堀川上中流	堀川	59	112
16	20	黒川	堀川	59	113
17	14	大江川河口	大江川	60	114
18	15	大江川緑地	大江川	60	116
19	27	天白川河口	天白川	61	118
20	28	天白川緑地	天白川	61	120
21	37	東山公園(植物園)	千種	62	121
22	40	平和公園一帯	千種	63	123
23	22	城山八幡	千種	64	125
24	33	名古屋城一帯	北・中	65	126
25	32	中村公園	中村	66	128
26	39	久屋大通公園	中	66	129

No.	H21 年度版 のNo.	調査地名	水系・区	調査地 紹介 ページ	調査 結果 ページ
27	26	鶴舞公園	昭和	67	130
28	21	興正寺	昭和	67	132
29	45	瑞穂公園	瑞穂	68	133
30	12	熱田神宮	熱田	68	135
31	23	高座結御子神社・高蔵公園	熱田	69	136
32	31	戸田川	港	69	137
33	35	南陽町	港	70	139
34		見晴台・笠寺公園	南	70	141
35	29	東谷山	守山	71	142
36	16	大村池・大久手池	守山	72	144
37	19	小幡緑地	守山	73	146
38	30	戸笠池・ほら貝池	緑・天白	74	148
39	25	勅使池	緑	75	150
40	44	水広公園	緑	76	152
41	34	成海神社・新海池	緑	76	153
42	17	大高緑地	緑	77	155
43	50	鷲津山	緑	78	158
44	38	水上姉子神社	緑	78	159
45	46	明德緑地	名東	79	161
46	13	猪高緑地	名東	79	163
47	43	牧野ヶ池緑地	名東	80	164
48	36	農業センター・針名神社	天白	81	166
49	11	相生山緑地	天白	82	168
50	47	八事裏山	天白	82	170
51	18	大根池	天白	83	171

調査地位置図



国道23号線庄内新川橋から南の庄内川河口と稲永公園一帯を含む地域が調査区域。

庄内川河口には葦原と干潮時は広大な干潟ができ、稲永公園内には名古屋市野鳥観察館、環境省稲永ビジターセンターがあり、野鳥観察や干潟等の学習ができる。この他公園内には稲永スポーツセンター、野球場、テニスコート、サッカー場があり市民の憩いの場となっている。

野鳥観察館では常設の望遠鏡で手ぶらでも気軽に野鳥観察が出来る。

国指定鳥獣保護区、特別保護地区。ラムサール条約登録湿地。



調査地区の特色

干潮時には河口に広大な干潟が現れ、春、秋の渡りの時期は多くのシギ、チドリの中継地になっている。

春から夏にかけてコアジサシのダイビング、冬から春にはハマシギ、カモ、カモメ等の大群、葦原ではオオジュリン等の冬鳥、観察館近くの川岸には人慣れしたオナガカモやユリカモメ等が集まって来る。カワウの大群、ミサゴ等の猛禽類は通年見られる。

稲永公園内では松林等の樹林があり、春、秋の渡りの時期にはオオルリ、キビタキ等の渡り鳥、冬季にはツグミ等の冬鳥が見られる。

水鳥から野山の鳥まで多種多様の野鳥が年間を通して観察ができる市内でも貴重な場所である。

オジロビタキ、ウミアイサを初めて確認した。ハシブトアジサシは平成11年の調査以来の観察となった。

調査員 沢辺 幹和

2 新川河口

水系 庄内川

H21 年度版
の No. 9

国道 23 号線より導流堤の先端付近までが調査区域である。導流堤で庄内川と分けられているが、鳥たちは庄内川河口と合わせ利用している。

ラムサール条約に登録された藤前干潟は、大都市の中にあって豊かな水辺の自然を有している。堤防に面して環境省の「藤前干潟活動センター」があり、干潟に入って学ぶイベントを定期的で開催している他、館内には干潟に関する展示が充実している。

調査地区の特色

トウネン、オオソリハシシギ、チュウシャクシギ等の旅鳥やハマシギやダイゼンのような越冬期を過ごす数多くのシギチドリが飛来し、スズガモやキンクロハジロ、ヒドリガモ等のカモ類も数多く利用している。

最近では魚食の猛禽ミサゴが増え、秋季 40 羽を超えることが多くなった。

カムリカイツブリも増えている。庄内川に続く葦原は、夏鳥のオオヨシキリ、冬鳥のオオジュリンが利用しており、日光川河口の葦原を含めカモたちの休息や隠れ場所であり、水質浄化の役目も果たしている。

前回の調査から、オカヨシガモが増えた。ミサゴは 2000 年ごろから増えており、減少の様子はない。ハマシギはかなりの減少が見られる。

調査員 森井 豊久・天野 千恵



3 日光川河口

水系 庄内川

H21 年度版
の No. 10

名古屋市西部と飛鳥村との境界を流れる日光川左岸、飛鳥大橋からサンビーチ日光川、国道 23 号線を経て日光川河口に至る約 2 キロの河川敷と中央境界線までの水面並びに河口部の小さな干潟が調査地である。環境省藤前活動センターより西へ 700m に位置する。全域が国指定鳥獣保護区になっている。

調査地区の特色

日光川排水機場上流域は水閘門により水位調整がなされ、大きな湖の様相を呈し、ホシハジロ、キンクロハジロ、オナガガモ、カルガモ、コガモ、カモメ類の大群が休息する。広い河川敷にはヨシや雑草が繁茂する草地と、一部地域ではセンダン、ネズミモチ、クルミ、エノキ、トウカエデなどの樹木が見られ、オオヨシキリ、オオジュリン、カワラヒワ、ヒヨドリ、ベニマシコ、アオジ、ツグミ、スズメが生息する。猛禽類ではミサゴ、チュウビ、ノスリ、ハイタカが狩りにやってくる。干潟には多くのシギ類、チドリ類、サギ類、カモ類が観察される。

付近で河川や都市高速道路の工事が行われている影響で、特に干潟部ではシギ・チドリ類生息数の減少傾向が見られた。

■地図は新川河口と同じ

調査員 古井 繁孝

調査地域は、東海通、明德橋・日の出橋から国道23号線、庄内新川橋までの2.4 km区間の庄内川・新川下流部である。定点及びラインセンサスで調査を行った。

岸沿いは広くアシ原が広がり目視での観察は困難な場所が多いため、鳴き声での判断をカウント結果としたが、実際の数は今回の結果よりも多いと考えられる。



調査地区の特色

調査区域は名古屋市内で最も広いススキ・オギ類を含むアシ原を有し、冬場はチュウヒを主とする猛禽類やオオジュリンの群れ、春から夏にはオオヨシキリやセッカの繁殖地になっている。

また最下流の河口部はラムサール条約登録湿地「藤前干潟」となっているため、調査区域が干潟の後背地としての役割を担っており、シギ・チドリ類の休息場所となっている。

休息に訪れる鳥は、最大干潮時間よりも潮が引き始めてからのほうが数が多く、観察に適している。

河川敷の鉄塔はカワウやアオサギの繁殖場所になっているが、春の渡りの際には50羽を越えるチュウシャクシギも罫として利用している。

夏場のコアジサシの減少や、冬期にハイイロチュウヒやコミミズクが観察されたのは、周辺環境の悪化により罫や捕食場所が減少したためかも知れない。水際でよく見られたバンは著しく減少し、替わって同じクイナ類のオオバンが数を増やした。カモ類は引き続き数を減らしているが、オカヨシガモだけは数を増やしている。シギチドリ類は総数を減らしているが、アオアシシギやオオハシシギは越冬個体の数を増やしている。

調査員 近藤 孝

5 庄内川（新前田橋～明德橋）

水系 庄内川

H21 年度版
の No.

庄内川新前田橋から明德橋までが調査地域。
右岸には葦原が広がり、また左岸には河川緊急道路が整備され市民の散歩道になっている。大当朗橋の近くには、大学の競艇部の施設があり、庄内川での練習風景がみられる。
河川の護岸工事等で葦原が減少し、景観が様変わりしてきている。

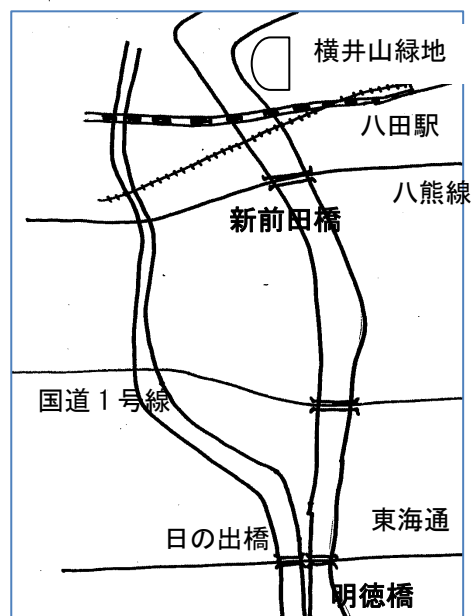
調査地区の特色

葦原では初夏から夏にかけてオオヨシキリ、キジのさえずりが聞かれ、上空を飛ぶコアジサシも見ることが出来る。冬季にはオオジュリン、ベニマシコ等の冬鳥がみられ、渡りの時期に思わぬ鳥に出会える楽しみがある。秋から春頃はカルガモ、コガモ等の鴨類やユリカモメ等のカモメ類、干潮時に少し出る干潟にシギ、チドリ、サギ類、時に猛禽類が姿をみせ、数は多くないが、野の鳥から水鳥まで見られる。

国道一号線の一色大橋近くには立派な松林が残り、景観を楽しみながら、気軽に探鳥できる場所になっている。

平成 26 年度は、オオハシシギ 8 羽が越冬した。

調査員 沢辺 幹和



6 横井山緑地・庄内川(横井大橋上流)

水系 庄内川

H21 年度版
の No. 49

庄内川万場大橋の下流、流れが大きく蛇行する左岸に位置する。緑地内には、季節を通して様々な花が咲き、遊具やジョギングコース、テニスコートなどが整備され、市民の憩いの場となっている。

調査地区の特色

面積の広い公園ではないが、樹木の種類が多く、弘法大師のある準源寺境内にはムクノキやエノキの大木があり、鳥たちのエサとなる樹種が多い。そのため、春、秋の渡りの季節にはオオルリやキビタキといった夏鳥の中継地点となっている。冬にはシロハラなどのツクミ類も多い。

堤防を上がると目の前に庄内川が流れ、カモ類、シギ、チドリの仲間も多く見られる。2014 年は河川の浚渫工事が行われていたが、工事が終わった 1 月以降、ホシハジロ、キンクロハジロの大群が見られた。冬の間アオアシシギの姿が良く見られた。

調査員 平井 直人



7 庄内川（枇杷島大橋～万場橋）

水系 庄内川

H21 年度版
の No.

6

調査区域は枇杷島橋から万場大橋までの間で、多目的広場や野球場、畑などがあり、車両や人の出入りが多い。竹林や桑林、藪があるため、野鳥には餌場や休息の場所として利用されている。

調査地区の特色

開けた場所が多く、ヒバリ、ハクセキレイ、ツグミを多数観察できる。春秋の渡りの時期には林縁で採餌、休息をする小鳥が観察でき、新幹線鉄橋上流で多数のカモ類が休息しているのを観察できる。上空が開けて見えるため、飛翔する猛禽を観察することもできた。

前回調査で多数確認されたヤマシギを全く確認できなかったのは、2009年秋の台風で生息地の桑林まで冠水した影響と思われる。また、調査期間中庄内川の浚渫工事が行われており、藪が減少したためか、冬季に小鳥が少なかった。

一方、前回調査では確認できなかったイワツバメを多数観察し営巣も確認できた。

調査員 木村 純子



8 庄内緑地

水系 庄内川

H21 年度版
の No.

5

庄内川の右岸、小田井遊水地を利用した「水と緑と太陽」をテーマとした約40haの公園。大芝生広場を中心に、バラ園や梅園、ピクニック広場、水鳥池、野鳥の森が広がり、サイクリングコース、陸上競技場、テニスコート、ゲートボール場を有する総合公園。名古屋市野鳥保護区

調査地区の特色

ヤマモモ、クスノキ、アラカシ、サクラなどの樹木が多く、野鳥の憩いの場となっている。

カワセミ、コゲラが繁殖し、年中観察される。春秋の渡りの途中、オオルリ、クロツグミ、ノゴマ、サンコウチョウ、ツツドリ、ホトトギスも観察できる。シロハラ、アカハラ、ツグミ、ベニマシコ、アリスイ、トラツグミが越冬する。

オオタカ、ハヤブサ、トラフズクが確認でき、池や川でカモ類、シギやチドリ、キジも見られ、一年中楽しめる、野鳥観察愛好家に人気の探鳥地である。

2014年初夏には、初確認のカラアカハラが飛来し、連日野鳥観察愛好家で活況を呈した。

調査員 中島 隆二



9 庄内川（水分橋～庄内川橋）

水系 庄内川

H21 年度版
の No. 4

水分橋から庄内川橋にかけての河川敷が調査地である。この地区は、サイクリングコースや歩道がよく整備されていることもあり、人通りが多い。南岸にはゴルフコースがある。また広いグラウンドでは野球やサッカーの試合がよく行われている。

調査地区の特色

カモ類ではオカヨシガモやヒドリガモといったカモが冬期に多い。カイツブリは冬期には越冬しているが夏にはいなくなるため繁殖はしていない。ホオジロやヒバリは繁殖していてもおかしくない環境だが数は少なく繁殖の証拠は観察できなかった。水分橋付近には砂礫地が中州にあって夏季にはコチドリが観察され、繁殖した可能性もある。しかしこちらも確証はない。新川中橋付近では複数回チョウゲンボウの幼鳥を観察、同一個体と思われる。秋の渡りの時期にはヒヨドリの群れが通過していった。

調査期間中に河川の浚渫工事が行われていたため、前回調査時と比較して鳥の種類は減少し、数も減っている。

調査員 野澤 徹也



10 庄内川（松川橋～水分橋）

水系 庄内川

H21 年度版
の No. 3

庄内川の河口から約2.5 km、守山区の松川橋から国道19号線の勝川橋をくぐり、守山区と北区をつなぐ水分橋までの約3 kmが調査区域である。松川橋から下流域は市街化が進んだ地区となり森林はほとんど無い。河川敷には野球場、ゴルフ場、ゲートボール場があり市民に広く利用されている。

調査地区の特色

河川区域であるが、河川敷は野球場やゴルフ場として利用されており、また庄内川の両側にはヨシ等の植物が多くあるものの、野鳥が隠れるところが少ない。しかしカワウ、アオサギやダイサギ、コサギなど数種のサギ類やカルガモを始めカモ類がよく観察された。春夏にはツバメやヒバリ、秋冬にはマガモやミサゴ、ツグミ等が観察された。

調査員 佐々木 和治



11 庄内川竜泉寺(吉根橋～東名阪)

水系 庄内川

H21 年度版
の No. 2

庄内川の河口から2.7km 地点に特別緑地保全地区の竜泉寺の森がある。その北側、守山区の吉根橋～東名阪庄内川橋までの左岸の河川敷には4kmに及ぶ自然が残されている。川には堰もあり山野の鳥から水辺の鳥まで見られる。

調査地区の特色

竜泉寺の森は大木が茂り、ヒヨドリ、シジュウカラ、メジロ、エナガ、時にはカケスも見られた。河川敷にはグラウンドや畑もあるものの竹林、松林、ニセアカシアの群落もある。大部分はササ、ヨシ、イバラ、クズなどのつる植物に覆われて足を踏み入れることが困難であるため、キジ、ホオジロ、アオジ、ウグイスの鳴き声だけで姿を確認することができなかった。冬季には上空でノスリ、トビなどのタカ類の舞う姿が観察された。

調査員 水野 弘



12 庄内川(東谷橋～吉根橋)

水系 庄内川

H21 年度版
の No. 1

岐阜県多治見市方面の溪谷を抜けてきた庄内川が、濃尾平野に流れ出た直後の区域である。瀬戸市から名古屋市に入った東谷橋から吉根橋までが調査区域である。兩岸の堤防上は道路になっており、車が通行できるところも多い。

調査地区の特色

この区域の庄内川は、所により瀬となっても、比較的安定した水量を保ち、緩やかに蛇行している。河川敷はかなり広いところが多く、水際まで草木が茂っていて、自然の生態系を維持できる環境が保たれている貴重な区域である。

それでも、従来の調査で見られた種が見られなくなったり、数が減少していることから、吉根、志段味地域など周辺の開発の影響は否定できないと考えられる。

前回調査からの変化として、ゴイサギが見られなくなり、コサギが激減している。オシドリも観察できなかったが、東谷橋の上流にはいる。コシアカツバメ、イワツバメは数が減っている。下志段味橋の上流の東名高速道路の橋に、イソヒヨドリが定着している模様である。

調査員 鎗居 壽子



市街地を流れる河川にある緑地公園であり、河川敷には緑地帯(主に草)、遊歩道、ベンチなどが設置されている。また、河川としては中流域で流れも緩やかになっており、ある程度深いところから浅瀬、中洲も点在している。

調査地区の特色

河川敷にある緑地公園であるため水鳥が多く見られる他、草原を好む小鳥類も見られる。また、上流から下流まで連続した同様な環境の一部であるため、渡りのルートにもなっているようである。

植生については、樹木もあるが緑地公園という性格上草地が多く、年に数回草刈りが行われ、環境が大きく変化するときがある。

調査員 川口 航



14 堀川（白鳥付近）

熱田区の中央を流れる堀川の旗屋橋から白鳥橋までの間と熱田神宮公園周辺が調査地域。左岸には熱田神宮公園、右岸には名古屋国際会議場や白鳥公園、白鳥庭園があり、まとまった緑がある。

調査地区の特色

熱田神宮公園や白鳥庭園からは春の渡りの時期にはキビタキなどの夏鳥の声を聞くことができる。初夏から秋にかけてはヒヨドリ、スズメ、カラス、ムクドリ、キジバト、アオサギ、カワウ、カルガモといった街中でよく見かける野鳥しか見られないが、冬にはユリカモメ、キンクロハジロ、ホシハジロといった水辺の渡り鳥が見られ、白鳥公園の芝生ではツグミ、シロハラといった冬鳥が見られる。

調査員 大橋 修



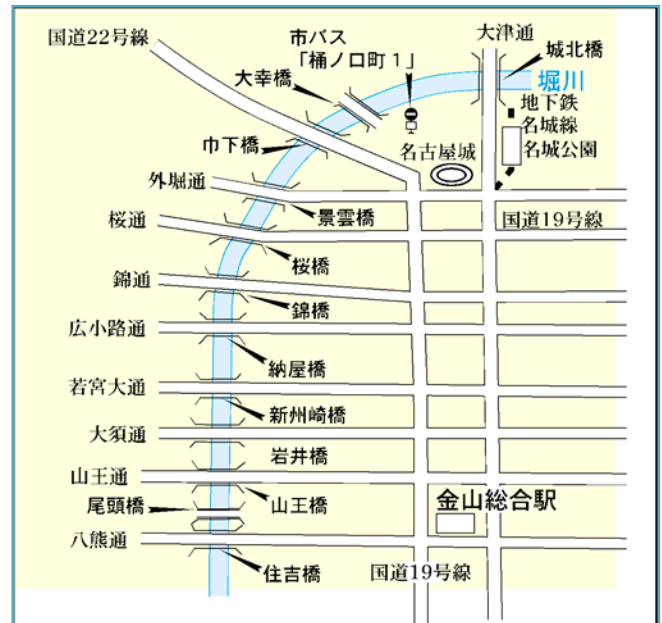
名古屋市ほぼ中央を南北に流れる堀川の北区名城一丁目、城北橋より、中川区尾頭橋一丁目、尾頭橋までの約6キロが調査区間である。城北橋から国道22号線付近までは川幅も狭く、兩岸からも望めるが、それより下流は兩岸に民家が並んでいてその間の橋の上から上下流を眺めての探鳥である。

調査地区の特色

国道22号線附近までの上流は、名城公園、お堀に近く樹木・草が多いので、カモ類など種類が多いが、今回は依然とくらべて数が少ないように思われる。

下流部の若宮大通り付近で、川沿いの建物に営巣するイソヒヨドリを観察することができた。

調査員 間下 浩之



北区を流れる堀川の城北橋から上流の夫婦橋までの流域が調査区間。猿投橋（通称ザーザー橋）から夫婦橋までの区間が御用水跡街園と呼ばれ、サクラの名所として親しまれている。遊歩道が整備されており、犬の散歩やジョギングに利用する人が多い。

調査地区の特色

下流の城北橋～猿投橋の区間と、猿投橋～夫婦橋との区間では環境が全く異なる。城北橋～猿投橋の区間では水面が開け、水深がある区間で、カワウやカモ類が多く観察される。猿投橋～夫婦橋の区間はサクラが茂り水面近くにまで枝が伸長しているため小鳥が多く観察できる。

前回調査時に見られたボラの遡上は見られず、カワウの観察数は減っている。春の渡りの時期に早朝夏鳥のさえずりを聞くことができる。

調査員 木村 直喜



調査地区の大江川は、兩岸の半分以上が工場敷地である。コンクリートの堤防が兩岸を全通しており、川の全長の1/3は川底に至るまで人口の溝である。

調査地区の特色

コンクリート打ちの川底を突き破ってアシが生え、野鳥の生息場所となっているが、年2回以上刈り取られる。特色は水鳥と工場内緑地を行き来する小鳥である。水鳥ではカワウが2,000羽近く見られた日もあり、11種類のカモ類やサギ類、カンムリカイツブリなどが観察できる。

調査員 芝原 隆男



大江川緑地は、南区を東西に流れる大江川約2kmを暗渠にし、上部を緑地にした都市公園である。周辺には工場や住宅地が広がり、緑地内を散歩やジョギングする人が多く、市民の憩いの場となっている。人工池や小川、噴水があり、ネズミモチ、クロガネモチなど実のなる植物も多く植えられている。草地のある西端は河口の為、渡り鳥の往来がある。

調査地区の特色

緑地の東側を流れる小川をつなぐように2つの人工池が有る。池には、常にカルガモ、セキレイがいる。オタマジャクシ、メダカを目当てにカワセミを見ることもある。シジューカラ、コゲラ、ヒヨドリ、カラス、カワラヒワが繁殖し、ムクドリ、スズメ、ハクセキレイ、セグロセキレイのヒナ連れを見る。メジロは1組が繁殖した。風雨の強い日に、キジバト、ヒヨドリ、セキレイなど緑地の中に集まる。午後の水浴びには、たくさんの鳥が池を利用している。渡りのシーズンには多種類の鳥を見ることができる。

調査員 亀井 圭子・久納 温子



19 天白川河口

水系 天白川

H21 年度版
の No. 27

国道 23 号線、天白川扇川橋付近から西へ名古屋港にそそぐ区域。

川岸は名古屋港臨海鉄道より西の河口付近は工場などの私有地なので、この付近は南岸の東海市側よりスコープで観察記録を取った。

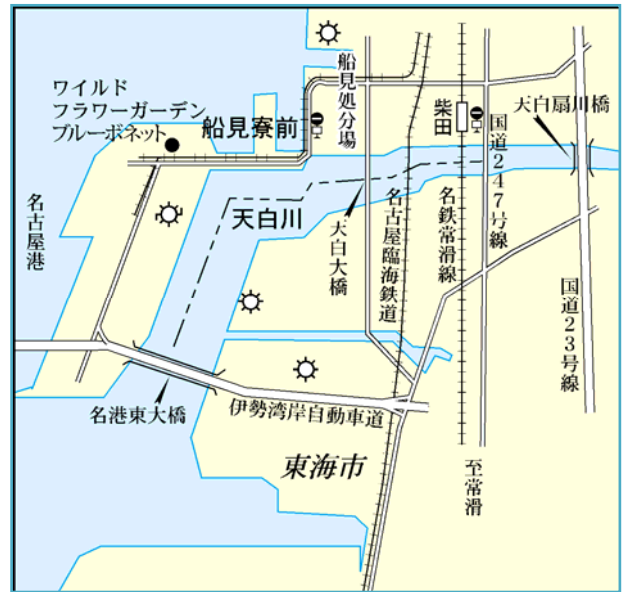
調査地区の特色

春のキョウジョシギの飛来は市内で最も多い河口であり、他にトウネン、キアシシギ等の旅鳥や、冬季はキンクロハジロ、ホシハジロ等のカモ類やユリカモメの群れが見られ、カワウも通年大群で見られる。

最近によくミサゴが飛来する。オオバンは各地で増えているから天白川でも例外ではない。イソシギは普通に見られる。

上流部の一般の人は入れない背割り堤、扇川との合流付近は、10 つがいのコアジサシが繁殖、給餌する姿が見られた。

調査員 森井 俊雄



20 天白川緑地

水系 天白川

H21 年度版
の No. 28

植田川との合流点から下流へ約 3km、天白川兩岸につづく緑地である。河川敷に整備された遊歩道や広場では、ウォーキングや犬の散歩をする人が多い。付近には住宅街や学校があり、平日は通勤・通学をする人の姿も多くみられる。水害対策工事が現在もさかんに進められている河川であり、菅田橋付近では調査期間中も大規模な改修が行われていた。

調査地区の特色

一部をのぞき、堤防上には大きな樹木がほとんど無い。しかし、水際には低いヨシやササなどが生える場所もあり、冬はアオジやホオジロのすみかになっている。植田川との合流点は、種数こそ少ないものの、冬のカモ類が多く集まる。秋ごろの調査では、開けた草地に現れたノビタキを観察することができた。平子橋付近の中州は、時期によりコチドリやイカルチドリ、イソシギがみられる。

調査員 村瀬 真琴



約 260ha の林に囲まれており、植物園はその内約 27ha である。「東海の森」や「万葉の散歩道」、竹林、梅林などがあり緑豊かな環境を有している。1 年を通じて野鳥観察が楽しめる。環境省の「日本の音風景百選」認定。愛知県鳥獣保護区。



調査地区の特色

自然林に囲まれるため、樹林を好む種類が多い。シジュウカラ、エナガ、メジロ、コゲラ、ヒヨドリなどが年間を通じて見られる。冬には、シロハラ、ツグミ、ジョウビタキ、ルリビタキが見られる。

春・秋の渡りの時期には、ヒタキ類、カッコウ類、ムシクイ類、ツグミ類も見られる。調査時間は9時の開園後であるが、早朝には、さらに多くの種が生息していると思われる。

調査員 天野 弘朗

東部丘陵地に広がる約147haの墓地公園。西北端には約6.5haの猫ヶ洞池、南部には約50haの「市民の森」と呼ばれる自然林が広がっている。市民の森の南側に東西に伸びる谷戸には、溜め池、湿地、竹林、ヨシ原等に加え、ボランティアの耕作する田んぼ、畑もあり、市街地の中であって、里山としての環境が保たれている。



調査地区の特色

「市民の森」は、アカマツ等の針葉樹、コナラ、アベマキ等の落葉広葉樹、ソヨゴ、ヒサカキ等の常緑広葉樹からなる混交林。中央に位置するハンノキ湿地は、乾燥化が進んだ状態から溜め池として再生。南端を東西に横切る中道沿いには、水源の奥池から大坂池まで小川が流れ、間に竹林、湿地、ヨシ原、水田、畑等多様な環境が広がっており、猫ヶ洞池も含めて、毎年70~80種ほどの野鳥の生息が確認されている。

観察される野鳥の種数、個体数がピークとなるのは、例年、冬鳥の飛来が本格化する10月末から、それに続く冬鳥のシーズン。猫ヶ洞池のヨシ原周辺には100羽を越える越冬カモの群れが観察される。また、春、秋の渡りの時期には、日替わりで多くの種類の渡り鳥を観察する事ができ、渡りの途中の中継地としての役割も果たしている。

2012年より、市民ボランティアによる猫ヶ洞池に残るヨシ原の再生活動をヨシ原周辺の清掃と併せて開始。徐々にではあるものの、年々ヨシ原の面積が広がりつつある。一足先に活動を開始した中道沿いのヨシ原では、2014年オオヨシキリとヒクイナの繁殖を確認。

調査員 木野 浩一

末盛交差点の北東に位置し、駐車場の敷地内には末盛城跡があり、一帯は閑静な森になっている。緑地保全地区、名古屋市野鳥保護区。

調査地区の特色

大きなアベマキが各所にあり、クスノキ、ムク、ヤツデ等が生育しているが下草はほとんどない。

春秋の渡りの時期には夏鳥が立ち寄り、冬季もシメ、シロハラ等が観察される。

8月に参道法面の工事が行われ、それに伴い多くの木が伐採され、鳥相が貧弱になったことは残念であった。



調査員 山本 卓也

名古屋城は、1612年に徳川家康が、その子義直のために、諸国大名に命じて築城させたものである。お城は名古屋のシンボルであり、現在も「本丸御殿」が再建中で、その完成が待たれる。

更にその北側に広がる名城公園は、緑の林が広がり、野球やテニス、ジョギングコース等が併設されており、市民の憩いの場となっている。



調査地区の特色

名古屋城や名城公園には、マツ、クスノキ、ケヤキなどの大木や、コナラ、クヌギ、ナンキンハゼなど多くの実のなる木が植えられており、春秋の渡りの季節には、多くの野鳥が立ち寄り、渡りのための栄養補給や、休息の場所として利用している。

又、冬季にはお城を囲むお堀に、カモ類やサギ類が集まり、市民の目を楽しませている。カモ類は、今回の調査でその全体数は減少したものの、常駐する種類は増えている。ゴイサギが激減したが、お堀などの環境の変化と思われる。

春には堀川を遡上するボラの大群を目当てに、数百羽のカワウが編隊を組み飛び交う姿も見られる。

夏季は、例年見られるコアジサシやササゴイ等が今回は見られず、種数が少なかった。

調査員 右高 幸男

中村公園は、豊臣秀吉をまつる豊国神社を中心に、西側は秀吉清正記念館、図書館などがある中村公園文化プラザ、太閤池・ひょうたん池があり、東側は香りの園、秀吉産湯の井戸がある常泉寺、加藤清正ゆかりの妙行寺など伝承的史跡がある。北には名古屋競輪場がある。

調査地区の特色

緑は決して豊富ではないが、クスノキやマツ、サクラが多くみられる。鳥類は33種を数え、春・秋の渡りには、センダイムシクイ、キビタキ、コサメビタキ、アカハラなどが見られるほか、太閤池ではカワセミが見えることもある。庄内川が近いためかカワウ、ダイサギなども観察される。カワラヒワが前回よりも増えていて、通年見られるようになり、繁殖も確認できた。

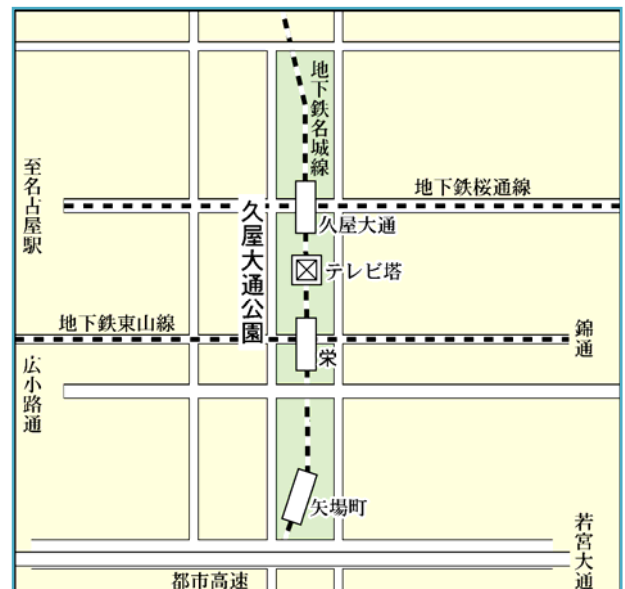


調査員 大主 順一

北は外堀通から南は若宮大通まで南北約2 Kmのビルに囲まれた細長い公園である。中央にテレビ塔が有り、ここより南側はイベント広場として年中イベントが催されている。北側は散策地帯になっていて緑の空間になっている。

調査地区の特色

テレビ塔より南側はイベント会場として使用され、鳥の生息環境としては極めて悪く、カワラバト、ハシボソガラス、スズメが主である。北側は樹木が茂り、シジュウカラ、メジロ、ヒヨドリも見られ、冬鳥はツグミ、シロハラも記録された。ハシボソガラスは久屋公園ではハシボトガラスより多くみられる。



調査員 近藤 哲雄

明治42年に誕生した歴史ある公園である。広さは約24haと広大で、園内にはサクラのほか、バラ園、菖蒲池、アジサイの散歩道などが設置され、四季折々の花を楽しむことができ、市民に最もなじみのある公園である。また公園の東側には龍ヶ池や八幡山古墳があり、このあたりで多くの野鳥を見かけることができる。

調査地区の特色

多くの植生に恵まれ、市内の中心の公園であるため、渡り途中の野鳥が羽を休めるため立ち寄ることが多い。公園であるため人の目に触れやすく発見されやすい。秋冬には美しいオオルリ、キビタキ、コマドリ、ノゴマなどが姿を見せ、バードウォッチャーを楽しませる。秋から冬にかけてオオタカ、ハイタカなどがハトやアオバトを時々狙っている。

過去にはミヤマヒタキ、カンムリウカッコウ、コウライウグイス、マミジロビタキ、シラガホオジロ、アカショウビンの記録もある。

調査員 水野 弘



名古屋市東南部に位置する興正寺は、八事山と号し、高野山真言宗に属する寺院。市内では最も広い寺域を有し、中でも国の重要文化財となっている高さ30mの五重塔は県下唯一の木造塔で1808年に建立され、興正寺の象徴ともいえる。この地域は文教地区となっており、興正寺の森はその中心となっている。特別緑地保全地区。名古屋市野鳥保護区。

調査地区の特色

興正寺境内の林は古くから人の手が加わっていない自然林で、サカキ・ソヨゴ・アラカシ・コナラ・アベマキ・カクレミノ等の広葉樹やアカマツなどの針葉樹の混交林である。中でもサカキの自然林は市内でも珍しい。夏から秋にかけてはキノコ類も多い。林内には「八事山を歩こう会」コースが整備されている。

今回の調査では新たにアオバト、ホトトギス、コサメビタキ、ウソ等9種の鳥が観察され、春・秋の渡りの時期には重要な中継地としての役割を果たしていると思われる。外来種のソウシチョウも複数回観察した。

年間を通して大小様々な行事が行われるため、早い時間帯での観察をお勧めしたい。

調査員 上田 秀徳



瑞穂公園の中を流れる山崎川が中心となり、周囲の住宅地に植えられた樹木も多い。朝には川沿いにウォーキングを楽しむ市民が多く、憩いの場となっていて、環境は良好。

今回は調査区を潮の干満の影響を受ける山崎川下流方面へ広げた。

調査地区の特色

瑞穂公園の中を流れる山崎川沿いが樹木も多く水辺の鳥も多く集まる。

瑞穂陸上競技場の東側に良く繁った広葉樹林があり、春の渡りの時期にはかなりの野鳥が立ち寄っていくと思われるが、確認することは難しい。

新瑞橋方面の下流へ行くと潮の干満により小魚などが遡ってくるなど餌が多いので多くの種類を確認できた。9月にはイソヒヨドリ二羽も観察できた。ササゴイも良く魚を捕えていた。

花が咲いた桜の木にハシボソガラスが針金ハンガー、洗濯ばさみで作った巣で抱卵していたのは都会の環境を表している。

調査員 山口 昭雄



熱田神宮境内は、不老長寿の仙人が住む理想郷の信仰から蓬莱島と称され、大都会の中でありながら静寂で、市民の心のオアシスとして親しまれている。面積は約 20 万㎡。深い緑に覆われ、中には樹齢千年前後と推定される巨木が数本もある。また敷地全体が特別緑地保全地区になっている。

調査地区の特色

境内の樹木はケヤキ、イチョウ、シイ、ムク、クス、クロガネモチ等、比較的広葉樹が多く、鳥の種類も多い。春秋の渡りの時期には種々観察できる。また森の中には野鳥だけでなく都会では珍しいマムシグサの花や昆虫のアサギマダラ、ゴマダラチョウ、夏にはタマムシも観察できる。今回の調査では、以前は入ることの出来なかった本宮の裏側に『こころの小径』が造られ、より楽しく観察できた。

調査員 今飯田 潔



高座結御子(たかくらむすびみこ)神社は小さな神社ではあるが熱田神宮の摂社で、子育ての神様として親しまれている。神社は歴史が古く、植生も自然のまま残っており原生林を思わせる風情がある。

この神社を取り囲む様に高蔵公園があり、近隣の親子連れや保育園児の散歩場所として良く利用されている。公園北側部分は野球場と洋式の庭園になっており、また庭園の一部は南大津通りと接しており、市街地の中であって複雑な環境となっている。特別緑地保全地区。名古屋市野鳥保護区。



調査地区の特色

小さな市街地の公園なので観察できる鳥の種類・数とも多くはないが、春・秋の渡りのシーズンには、市街地でもこんなきれいな鳥がと思わせる、キビタキ・オオルリ・ルリビタキが見られた。渡りの途中の休憩場所として機能しているのではないかと思われる。また、神社境内で掃き清められた落葉は木の根元に戻されており、クスやツバキなど豊かな緑を保ち、餌となる虫などの発生に寄与していると思われる。

野良猫が何匹か棲みついており、そのためか、前は地上や低位置でよく見られたシメ、ツグミ、セキレイ類が見られなかったか極端に少なくなったのは残念であった。

調査員 佐藤 文昶

国道1号線から下流の東海通までの戸田川と川沿いに整備された戸田川緑地が調査区域。

年間を通し散歩、デイキャンプ、いろいろな花を楽しむ人が多く来園している。全体に植えた木々も生長し適度の間伐も行われ川辺のヨシの中にもいろいろな鳥が見られる。

公園内に体験型の田が作られ、周りにアシ原が出来た。

調査地区の特色

渡りの時期にはキビタキ、ムシクイ類を見るようになり、何年ぶりかでサンコウチョウも見られた。

ヨシ原もよく伸び、オオヨシキリ、オオジュリン、カシラダカやゴイサギも隠れるようにいる。2014年度は冬場ミコアイサも居ついた。



調査員 米倉 静

名四国道（23号線）より北の茶屋地区と藤高地区の水田地帯が調査地区。

昨年大型ショッピングモールや名古屋市西部の斎場建設のため、水田面積が半分ほどになってしまい、鳥の数も極端に減少してしまった。

調査地区の特色

水田地帯なので水鳥がメインだが、田植え前や稲刈り後の水田にシギ、チドリが入ることがある。セイタカシギ、ホウロクシギ、エリマキシギ等も観察できた。

特筆すべきは秋の渡りの時期に見られるチュウサギで、一つの水田に100羽近くの群れで採餌する光景は圧巻であった。



調査員 前田 崇

今回初めて調査地とした見晴台、笠寺公園は、弥生時代後期の住居跡が発掘され、その保存展示館が設置されている。双子の姉妹金さん銀さんにちなんだ金さん桜、銀さん桜も植えられている。

調査地区の特色

小規模であるが、スダジイ、シラカシ、ヒノキ、クスなどからなる弥生の森を形成し、大木も残っている。公園はよく整備さ

れていて草地等となり、見通しも良く小鳥の隠れる場所も少ない。弥生の森では春・秋の渡りの時期にはオオルリ、キビタキ、コサメビタキ、ムシクイ類、秋にはサンコウチョウ、クロツグミも観察できた。通年観察されるのは、スズメ、ムクドリ、ヒヨドリ、キジバトなどだが、6月には周辺で繁殖したと思われる幼鳥を含む100羽前後のムクドリが見られた。オオタカ、ミサゴのタカ類もみることができた。



調査員 小川 和彦

名古屋市の北東部にある山で、愛岐丘陵が高度を下げ、尾張平野になる所にある。頂上を境に北東側は瀬戸市であり、北側は庄内川（土岐川）をはさんで春日井市と接している。名古屋市側はほぼ県有林であり、瀬戸市側は定光寺に連なる国有林となっている。また頂上には尾張戸神社がまつられており、付近一帯は寺社林となっている。愛岐丘陵からぼつんと飛出した形をしており、そのせいもあって古くから渡り鳥の通過地点として有名である。また、頂上は名古屋市の最高地点でもある。



調査地区の特色

植生としては、落葉広葉樹と常緑広葉樹の混在する森であり、北東部側（瀬戸市）は過去の山火事ののちヒノキが植林され、人工林の傾向が強い。戦後薪炭として伐採されており、二次林となっているが、次第に森の遷移が進んでおり特に県有林は照葉樹林化が進みつつあると感じられる。

鳥類の生息はこの辺りのものと特に変化はないが、渡りのシーズンはタカ類を初め多くの渡り鳥の通過地点となっており、過去には各種の珍しい鳥も観察された記録がある。照葉樹林化に伴いクロジの越冬が増加してきている。また最近問題となっているソウシチョウが秋から越冬しているものが観察された。

このように森林の進化とともに鳥類相も豊かになってきているが、名古屋市による古墳をよく見えるようにする目的での森林の伐採計画があり、自然保護の観点からも中止すべきことと考える。

今回の調査で多くの哺乳類が観察された。ホンドリリス、ムササビ、ホンドギツネ、タヌキ、イノシシ、カモシカ等が観察された。特にイノシシの活動は盛んで、毎回のように新しい足跡や採餌跡が観察されている。

調査員 磯部 譲治

どちらも名古屋市の北東部に点在する農業用のため池である。

大久手池は東側に森があり、それ以外はかつては田園地帯であったが、現在は西側の一部を除いて宅地化が進んでいる。

大村池は森林公園に隣接しており、まわりは森やゴルフ場に囲まれた環境にある。

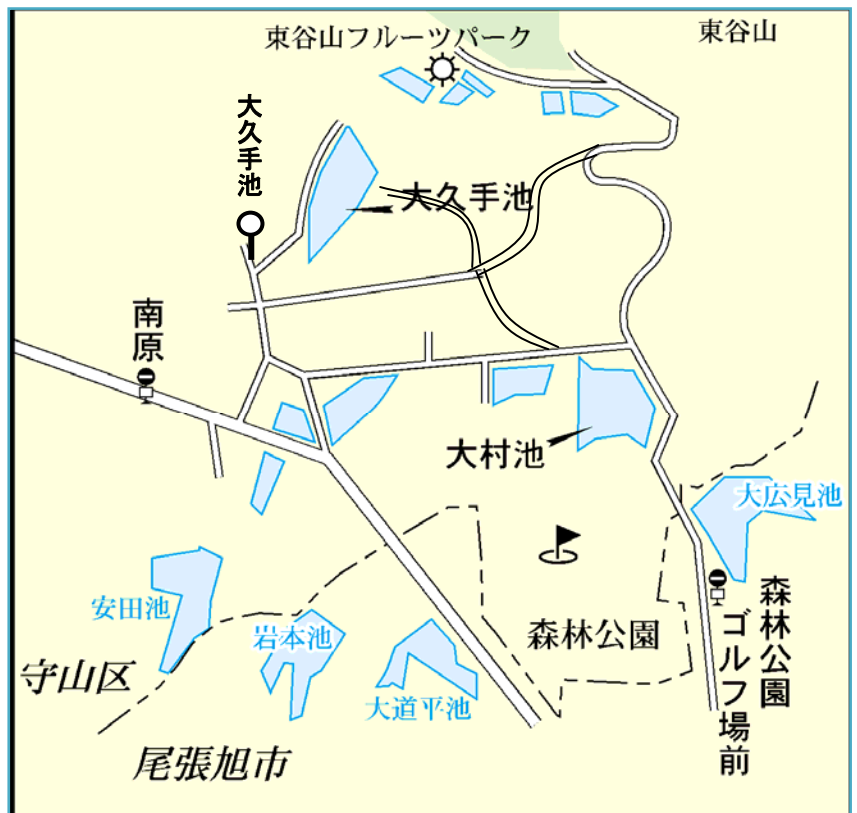
調査地区の特色

大久手池のまわりは、東側は縮小されてしまった森が一部残っているが、それ以外は区画整理によりかつての田園

と葦原は姿を消している。これに伴い今回更にセッカやオオヨシキリが激減している。(セッカはついに観察されなくなった。) まだ一部残っている笹原ではベニマシコやアリスイが観察された。しかし、この僅かに残った自然も名古屋市の計画では古墳の展示館の計画があるようで、今後は無くなっていくことが非常に心配される。是非このまま残してほしい自然である。

大村池のまわりは落葉広葉樹の森とゴルフ場であり、植生に大きな変化は見られない。今年の観察での特徴としては、池のなかに入って釣りをする釣り人が冬の間は見られなかった影響で、多くのオシドリの越冬地となっていた。また4月と3月には渡りの途中のヒレンジャクが観察された。釣り人の節度有る行動を促すような管理が求められていると感じる。

調査員 磯部 譲治



東の東谷山や瀬戸定光寺から連なる丘陵地帯の西端に位置する。また北側は庄内川にも隣接し、近年まで野生リスも見かけられたことは、鳥のみならず多くの哺乳動物たちも生息する環境にあったと思われる。こうした自然環境を利用してつくられた自然度の高い公園であった。しかし近年、公園東の志段味地区の開発が急速に進み、都市公園としての性格を強めつつある。今後は、都市の中の大きな緑地帯としての意義が高まってゆくと考えられる。

調査地区の特色

都市の公園としては大きく、多様な環境が残されている。芝生広場・子供広場・球技場と雑木林などの平坦部、大小の池とそれを結ぶ水路・小川・湿地などの水辺の環境、さらに樹木が茂り、木道・散策路が通る起伏に富む地形などがある。

植生としては、アベマキ・コナラなどの落葉高木、クス・クロバイ・カシなどの常緑高木にアカマツが点在する。

鳥たちの冬の食料として、ヒサカキ・シャシヤンボ・カキ・センダンやハゼ・ヌルデなどのウルシ類の実があり、鳥たちの大切な越冬場所になっている。こうした多様な環境は、カラ類、アトリ類、ヒタキ類を始め、カモなどの水鳥たちにとっても過ごしやすい環境になっていると思われる。

7月に、何十年ぶりかでコジュケイを記録した。正確には園外からの鳴き声であったが、記録に残すこととした。

調査員 佐久間 淑章



戸笠池は天白区、ほら貝池は緑区の住宅地の中にあり約300m離れている。ほら貝池の周りは桜並木で、市民の散歩コースになっている。池の東側がヨシ・ヒメガマの植生となっている。戸笠池は西側は護岸されているが、南東側に雑木林があり東側にはヨシ原、芝生広場が広がっている。

調査地区の特色

戸笠池の南東側には、コナラ、ヒサカキ、ヤマハゼ、カワヤナギ、ハリエンジュ、ヤブツバキ等の雑木林があり、渡り途中の小鳥たちの良い羽休め地点となっている。春にはキビタキ、センダイム

シクイ、秋にはエゾビタキ、コサメビタキ、サメビタキ、冬にはジョウビタキ、シロハラ、ツグミ等が観察された。この池は6月から10月までの間は水位が下がってしまうので、アオサギ、ダイサギ、コサギが餌探しで忙しく動き回っていた。11月からは水位が上がり、潜水ガモのホシハジロ、キンクロハジロ、オオバン等が多く見られた。

ほら貝池のヒメガマにはヨシゴイが毎年飛来し営巣、同じころヨシ原にもオオヨシキリが飛来し、賑やかにさえずり営巣する。秋にはノビタキ、早春にはオオジュリンが羽休めにしばらくの間観察された。

ほら貝池のアシ原ではツバメの罫入りが見られた。2014年7月17日には1000羽位、7月30日には3000羽位、ピークは8月上旬で、8月24日には500羽に減った。



調査員 杉浦 瑠美子

名古屋市緑区東部のみどりが丘公園(60ha)に隣接し、豊明市との堺に位置している。池の広さは23haである。池の周りには名古屋市、豊明市の墓地がある。最近、墓地が拡張されて年々緑が無くなっている。池には愛知用水の水がはいっている。池は平成15年から25年に掛けて護岸工事されて、きれいになり、周囲2.7kmを約1時間で1周できる。豊明市側には野鳥観察地点があり、ブラインドが整備されている。

調査地区の特色

林はコナラ、アカマツがほとんどである。所々に竹林がある。

春、秋にはヒタキ、ムシクイの移動の中継地となっている。池の周辺には葦が茂り、夏季にはオオヨシキリの繁殖地になる。冬季には時々タカの仲間のノスリ、ハイタカ、オオタカが見られる。池には年中カワウが見られ、冬季には珍しいカモでミコアイサ、ヨシガモがみられる。また、周りの葦原にはベニマシコ、オオジュリンも見られる。



調査員 佐藤 武男

名古屋市東部の、中京競馬場北1kmに位置する約6haの公園。西側に水広下池、東側に林がある。林内には散策路が整備され、芝生広場とともに市民の憩いの場として利用されている。最近、周りは宅地造成され新築の家が多く建っている。水広下池では年中、釣人がいる。約30分で散策できる。

調査地区の特色

林はコナラ、アカマツがほとんどで、所々に竹林がある。冬にはドングリの実が沢山落ちている。

池にはサギ、カイツブリが年中見られる。春、秋の渡りの時期にはヒタキ、ムシクイが見られる。冬季にはツグミ類がよく見られ、時にはトラツグミをみることもある。夏季はセミ類がよく鳴いている。

調査員 佐藤 武男



成海神社は名鉄鳴海駅の北1kmにある小規模な神社森である。西に天白川、南に扇川、南東に大高緑地と囲まれており野鳥保護区に指定されている。近くの新海池は北側にヨシ原があり釣り人で賑わっている。野球場や広場もあり丘陵地には林もあるが北側の展望が良く多くの人達で賑わって市民の憩いの場となっている。共に住宅地に囲まれている。

調査地区の特色

成海神社は鎮守の森としてクスノキやカシなどの常緑広葉樹が多い。近年神社の周りの樹木が伐採され整備されたが、シジュウカラやメジロなどが一年を通してよく見られ影響はなかった。以前に比べてカラス類、ドバトは減少した。

新海池では丘陵地から北西方向の伝治山にチュウサギなどの繁殖コロニーがあるのが良く見え、早朝や夕暮時には飛び交う姿を観察することができる。その一部のアオサギやゴイサギが3月頃より新海池のヨシ原を利用して繁殖を始めていた。池には魚も多くミサゴも上空を舞い、狩りをする姿も見られる。冬季にはカモ類もいろいろ見られオオバンが居つくようになった。

調査員 矢田 和子



名古屋市の東南部に位置する約100haの県営公園。国道1号線から入ると琵琶池中心に菖蒲園、梅林、若草山、遊具、野球場、バーベキュー広場、公園中央には管理事務所を中心に交通公園、プール、テニスコート、桜の園などがある。

公園南部は自然林が残り、四季を通じ憩いの場となっている。管理事務所主催行事や、多くのボランティア団体の活動も活発に行われている。

東側に環状2号線ができ、交通アクセスが良くなった。公園周辺は宅地化が進み、愛知県鳥獣保護区、名古屋市野鳥保護区として貴重な自然となりつつある。



調査地区の特色

今回の調査では90種が観られた。琵琶池中心にサギ類・カワセミ・カイツブリ・バン・カモ類等の水鳥が多く観られた。南の自然林では春、秋の渡りの時期にはオオルリ・キビタキ・ムシクイ類等、冬季にはカケス・クロジ・シロハラ等森を好む種類を観ることができる。河川から遠いこともあり、ユリカモメやシギ類・トビを観ることは稀。

今調査ではオシドリ数羽、ヒクイナの越冬が確認できた。一方、かつては良く観られたキジ・コジュケイはほとんど観られなくなった。又ヒキガエルの産卵も激減している。

緑地一帯は湧水が豊富で、デイキャンプ場に近しい花木園では湿地を再生する試みが行われており、春のトウカイコモウセンゴケや夏から秋にかけてのシラタマホシクサなど、東海地方に固有といわれる湿地性の花を見ることができる。

調査員 関上 裕文
谷 幹雄

鷺津山は JR 東海道本線大高駅の東に位置する。戦国時代、大高城の今川勢を牽制するため、織田方によって永禄2年に砦が築かれた。現在は鷺津砦公園となり史跡として残されている。

調査地区の特色

調査地は鷺津砦公園と周辺の雑木林とした。照葉樹林と竹林から構成され、見通しも悪く鳥を探すのに苦労した。

上空にはカワウ、サギ類の飛ぶ姿が見られ、渡りの時期はオオルリ、キビタキ、ムシクイ類、アカハラ、コムクドリなどの夏鳥が観察できた。

秋には西へ行く2羽のサシバを観察した。冬季はアオジ、ジョウビタキ、シロハラが越冬している。トラツグミも見られた。

調査員 小川 和彦



ヤマトタケルの草薙剣に縁が深く、熱田神宮の摂社で「お氷上さん」と呼ばれ人々の信仰を集めている。神社と火上山の森を含めた約80haが調査区域。近くに名古屋高速や知多半島道路、伊勢湾岸自動車道のインターチェンジ、大型ショッピングセンターがあり、最近急速に開発が進んでいる。特別緑地保全地区。名古屋市野鳥保護区。

調査地区の特色

常緑樹と落葉樹が混在した火上山の森にはクスノキ、ムクノキ、コナラの大樹も混じる。森の南には畑が広がり、梅やミカンの木も植えられている。主に野山の鳥が観察され、春にはキビタキのさえずりを聞くことができる。一年を通してヒヨドリやメジロが多く観察され、運が良ければ、オオタカやノスリ、ミサゴが上空を飛ぶ姿が見られ、森の中で食痕も見つかる。平野池ではカワセミやカルガモがほとんど見られなくなり、カイツブリも繁殖しなくなってしまった。

調査員 大原 一修



名東区の北部に位置し、面積は18ha。周囲を住宅地に囲まれているが、比較的自然が保たれた大変貴重な緑のオアシスといえる。釣りの出来る明徳池や芝生広場、キャンプ広場もある明るい里山的二次林であるが、公園化が進み自然度が衰退、松や桜・コナラ・アベマキ等の高木林が減少し照葉樹林化が進んでいる。

調査地区の特色

ほぼ通年確認できる野鳥は13種。カイツブリ、ゴイサギ、アオサギ、キジバト、コゲラ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、ヤマガラ、シジュウカラ、メジロ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス。

減少した野鳥は、バン、アオゲラ、アカゲラ、シメ、ヒガラ等。

春秋の渡りの季節には、ヒタキ類やムシクイ類、アマツバメが見られた。暑い夏季は野鳥も少なくなるが、11～4月にはここで越冬するカモやツグミ類、アオジ等の冬の野鳥たちを確認できる。

近年、高木林や林床の伐採によって、野鳥の生息・繁殖環境が悪化している。野良猫が多数住み着いて、野鳥や小動物やタヌキ等も被害を受けている。

調査員 浦上 力雄



東名高速道路名古屋インターチェンジの南側に位置する猪高緑地は、面積が66haの都市計画緑地である。塚の杵池を始めとして4か所の池がある。雑木林が多いが竹林も多く、散策路も整備され、市民の憩いの場所となっている。

前回の調査時よりますます宅地が緑地ぎりぎりまで開発されている。

調査地区の特色

年中みられる鳥としてはカルガモ、メジロ、シジュウカラ、エナガ、コゲラなど数多く見られた。12月30日には海岸や大きな川でしか見られないワシタカ科のミサゴが見られた。塚の杵池の水面に3回もダイビングして魚を捕ろうとしたが失敗した。水面にいたオオバン、ヒドリガモが逃げ回っていた。



調査員 渡辺 滋

名古屋市名東区に位置する愛知県営の都市公園であり、総面積は約147ha。緑地の中央部に約72haのゴルフ場があり、それを取り囲むように公園の施設が散りばめられている。

北部に江戸時代に作られた灌漑用のため池である牧野池があり、面積約23haと名古屋市内最大の広さである。池の周囲には遊歩道が整備されており、ジョギングをする人、散歩をする人など多くの人で賑わう。愛知県鳥獣保護区。



調査地区の特色

牧野池の東側にはヨシ原が広がり、西側では夏季に準絶滅危惧種のガガブタが一面に繁茂する。西南端にはヨシ原とハンノキの群生地がある。

池は東西に細長く浮見堂や半島状に突出たポイントもあって、冬季はカモ類を直ぐ近くで見ることができる。ヒドリガモが最も多く、次いでオナガガモ、ヨシガモ、マガモ、カルガモが多く見られる。ミコアイサとカンムリカイツブリは毎年飛来する。オオバン、カイツブリも多く見られ、カワセミは通年飛び回っている。

林地ではコゲラ、ヤマガラ、シジュウカラ、ウグイス、エナガ、メジロに加えて冬季にはツグミ、シロハラ、ルリビタキ、ジョウビタキが見られる。芝生広場ではムクドリ、ハクセキレイ、セグロセキレイが見られ、猛禽類ではミサゴ、オオタカが見られる。

市街地の都市公園として年々整備が進み、森が明るくなり、利用者が増えているが、野鳥の生息する自然環境としては徐々に悪化しつつあるように思われる。

調査員 木村 憲司

農業センターは名古屋市東部丘陵地にあり、名古屋コーチンや家畜の放牧、しだれ梅園など緑の豊かな農業公園になっている。

針名神社は農業センターに隣接し、コナラ、アベマキなどの落葉樹林とヒノキ、サカキや竹林が混在している。

名古屋市野鳥保護区

調査地区の特色

都市計画道路の開通、区画整理などにより緑地は少なくなっているが、市緑政や「荒池ふるさとクラブ」の活動などにより、竹林等の整理が進められ公園として整備されている。

農業センターを中心に大堤池、針名神社、荒池緑地、荒池と四季を通じ野鳥の憩いの場は確保されている。

特に針名神社や荒池緑地は春秋の渡り鳥の休息地となっていて、オオルリ、キビタキ等の美声を聞くこともできる

荒池では冬季にカモ類が勢揃いし、オシドリ、ヨシガモ、ミコアイサなど美しい鴨も観察できる。

緑地が分断された影響で、ヒバリ、ホオジロ、コチドリの繁殖が見られなくなった。



調査員 古澤 穎一

規模の大きな雑木林が残っており、名古屋市内では貴重な存在と言える。これは里山林とも言われ、元来、薪炭用材や落ち葉の採取など、人々の日常生活とともに管理されてきた。里山林を維持するには継続的な作業が重要なため、「オアシスの森」としてボランティアの人々によって管理活動がなされている。

調査地区の特色

年々森の樹木が育ち、大きな木が見られるようになってきた。そのためか、オオタカがほぼ通年見られ、今まで見られなかったアオゲラも冬季に見られるようになったと思われる。10月にはコノハズク、11月にはオオコノハズクを記録できた。

また、タヌキやキツネ、ネコなどが生息しており、そのため地上性のキジとコジュケイが姿を消したと思われる。

調査員 三枝 卓



平和公園、東山公園へと続く東部丘陵地の一番南に位置している。面積は約13haある。国道153号線のバイパスとして作られた山手植田線が中央部を走り、森が二つに分断されている。バイパスから北部分は東山公園天白溪湿地特別緑地保全地区。

調査地区の特色

八事裏山の森の中に、コアラの餌ユーカリを栽培している。植栽面積4000㎡、本数1200本、種類は6種。

コナラ、アベマキなどのブナ科の落葉樹、アラカシ、サカキ、ヒサカキなどの常緑樹、尾根筋にはソヨゴ、アカマツ、ツツジなどが生えている。

周囲の道路の交通量の増加により、鳥の種類の減少が見受けられる。

調査員 小島 弘



天白区のほぼ中心にある天白公園の北入口にある。この池は市民から愛されており、週日散策の人や体力トレーニングに励む人たちの姿が見られる。

調査地区の特色

池を中心に年間を通じて毎月18種類以上の野鳥たちが見られる。春はキビタキ、オオルリ、センダイムシクイなどが羽休めにやってくる。秋はツグミ、シロハラが、冬は池にカモ類やバン、クイナの類などがやってきて一層賑やかになる。

4、5月には当地では珍しいヒレンジャクやコムクドリを確認、3月にはヒクイナも確認した。

大根池は野鳥たちにとって大切な餌場であり休憩の場でもある。



調査員 杉浦 繁夫